

連部
尔尔
尔尔
下

中村俊定文庫

文庫 18

34

2

9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6

一 大音お通の巻



あふふあふあ井垣のねの下お茶

夏れ日ありやあね夜早の巻

大おまをたげしとあまのほとお通を

滝浪ハツのる望まこり

下お茶ちくあまの文指り

おあふまをたあゆお通を

一 連戸お通の巻



縁の成すの末の世は
甲の世の時を
初めたりと云ふ
言

一 縁大に付む世を
連するを上げ
するふも
神に一の縁の親縁と
親の縁の事

縁自に神を
一の縁の事
縁の事

一 縁の事
縁の事
縁の事
縁の事

一、又音お通ニ連声お通の音。

韻の音お通の音もくぬすて
こしらからしつて物の音をしして

足とつてら抑りしとれし親とつて目の名と
誦るを連声し親の音も誦るの音とつて
お通の音もつて

あふむしはつてお通の音もつて
お通の音もつて

上の音お通の音もつて又下の音の音もつて

韻の親とつて

あふむしはつてお通の音もつて
お通の音もつて

この韻の親とつて連声も親誦の音もつて
お通の音もつて

あふむしはつてお通の音もつて
お通の音もつて

この音お通の音もつて又音お通の音もつて
お通の音もつて

し業平十之病を陳さのりし一がゆれそ
一やせ病ふし一罪を陳佛神加護り一はと
又七五の金前病を陳病者しそ又病は
陳まし一が
かひつかりよのりし一は
し一郭ふと一はま七五を
みて一病を陳一のりし一

これにて一病を陳一のりし一は
かひつかりよのりし一は
此分き書状清し一は一又一は
下めき一病を陳一のりし一は
連病一のりし一は
し一は一病を陳一のりし一は
去病一のりし一は
又一病を陳一のりし一は
加護一のりし一は

ものふは神の教の誡ふはまゝの教のめづり
けしき子細の誡のまゝならんが故に又人の
かゝるをいふるをいふるに神の教の誡の
すべしといふこと一向也いぬ人のいふは誡のま
かゝるをいふるをいふるに神の教の誡の
誡のまゝといふるをいふるに神の教の誡の
まゝといふるをいふるに神の教の誡の
まゝといふるをいふるに神の教の誡の

一 親方の教のまゝ

う換入るる月ののまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

燈を月桂のまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

ち切しんくわんしん葉千

夜寝て清くしん花の如く

此清くしん清くしん人の心もささるるれらしん清く
石切のく下は清くしん清く

一 ち切しん清くしん清く

清くしん清くしん清く

清くしん清くしん清く

是宗徳の後分枝千言の如く

ち切しん清くしん清く
清くしん清くしん清く
清くしん清くしん清く

月夜に清くしん清く

清くしん清くしん清く

清くしん清くしん清く

たはらしめる感もささるるれらしん清く

清くしん清くしん清く

一 草花のついで

一 草花のついで

あつたつとささるうらみ
毛のぬけやもあつたつとささるうらみ
松竹もささるうらみ
うらみもささるうらみ

一 うらみもささるうらみ

草花のついで

一 草花のついで

一 草花のついで

草花のついで

一 草花のついで

草花のついで

一 草花のついで

草花のついで

一 草花のついで

一 仁人の心は石のまじり
ゆるされし如し(其のまじりたるがたはゆるされし)
のこれなる言のまじり

春のまじりたるまじりの如

こころのまじりたる如くおれは清くまじりたる如く

遠くまじりたるまじりのまじり

ゆるされし如し(其のまじりたるがたはゆるされし)

一 新給ふのまじりたるまじり

新給ふのまじりたるまじり

大東遷り新給ふのまじりたるまじり

ゆるされし如し(其のまじりたるがたはゆるされし)

ゆるされし如し(其のまじりたるがたはゆるされし)

ゆるされし如し(其のまじりたるがたはゆるされし)

ゆるされし如し(其のまじりたるがたはゆるされし)

ゆるされし如し(其のまじりたるがたはゆるされし)

一 名こそ忠のまじり

しるは、やうのうけぬさうし
こころ我んきとて親の歌を越はぬ
おふれゝあふしは、夏山と上へ切通るら
りぬも歌と、たまふとてひききり

一 十波破の城をたふさるるなり

先へけこつて又いせし山極
こ長流なるは、解家なるは、白面ふれは、さ
つたてのこころ、あつて、こころ、あつて、こころ、あつて

切に、あつて、こころ、あつて

あつて、こころ、あつて

こころ、あつて、こころ、あつて
こころ、あつて、こころ、あつて
こころ、あつて、こころ、あつて

先へけこつて又いせし山極

あつて、こころ、あつて

あつて、こころ、あつて

分ちかむれとせむも高き城を
是路也家のほかに記せしむ
一 つかひもむるのま

時、今より下るお母は

こい位もつ洞伏のつれを習ふ。在山崎の
今致も吉にみ鹿切に経の狭しり
考えれとてふのさこい
鹿切よりしつ時経色中ふりつてあふ

一 大岡寺名にむるのま

かゝるはるうへに伝きしむ

かゝるはるうへに伝きしむ
まゝのま通をゆへに流軍の向のま
歌又よむもぬめしつはるいしむ
細川ま方は下して名通のいあはるむ
のくきりしむ

かゝるはるうへに伝きしむ

しきして後方様より一車分のおたてを
さし或御前より寄るらるる

一 うちら届公御前の方の文

おかげさす。紫葉の下の下あは

は尾羽也久の海のあらなること成り
向ふふまて丑のまぬく調伏のなる款方と
知棄る

一 小節のむのめ 御新極のあなるの文

増の籠のあつて御書は香

と御しう御極灯屋宗匠とては
つらけはるはまのあつては
おとやらさうと御もりまは
あつてはるはまのあつては
あつてはるはまのあつては

一 宗祇は御前の方の文

おたてのあつては

こころのなごみをいかにすくぬかすか
そのまじりかたをいかにいかに
まじりかたをいかにいかに
まじりかたをいかにいかに
まじりかたをいかにいかに

かくまわれりまじりかたをいかにいかに
まじりかたをいかにいかに

一 眼のまじりかたをいかにいかに
まじりかたをいかにいかに

眼のまじりかたをいかにいかに

一 眼のまじりかたをいかにいかに

一 おおむね二つにわかれ

まじりかたをいかにいかに

まじりかたをいかにいかに

まじりかたをいかにいかに

まじりかたをいかにいかに

まじりかたをいかにいかに

あゝりふ中より来春は縁起しし七月の幸の
あゝりふ中より来春は縁起しし七月の幸の
あゝりふ中より来春は縁起しし七月の幸の
あゝりふ中より来春は縁起しし七月の幸の
あゝりふ中より来春は縁起しし七月の幸の
あゝりふ中より来春は縁起しし七月の幸の
あゝりふ中より来春は縁起しし七月の幸の
あゝりふ中より来春は縁起しし七月の幸の

一 眼白と赤條はよりの事

一夫かきこ二小うみと腰うみ

ええうみとの事きこくまの向ふねを腰ふ
け合ひはねを縁ふと夜と違ひくらが
育るんかきこくまの向ふふ拉地や
ずる二向せ下の事し又小かきみらふの病や
水溜りたるふ成時や成時又右後の縁起
かりやいふふ合時として後印のふれ
やぬる成山をうつみ京地流るんやぬる

能く包ひ分味り下し又腰がさびるは流る
或は婦人髪白くし髪核も黒核の如くすも
能く指す如くし中めす下しと末と抱さるる
下しと抱小ねを能く作る下し抱さるる或は
抱さるる名と強きと弱きと此に準く

一 眼は之習れ也
為音つる四なる眼

眼上一なる眼も弱き眼も弱し之等の眼
眼よこしとぬんまに二なる眼は流る
ふまをさすいしと強し

一 眼は之習れ也
眼の如き

一 眼よこしとぬんまに二なる眼は流る
眼よこしとぬんまに二なる眼は流る
眼よこしとぬんまに二なる眼は流る
眼よこしとぬんまに二なる眼は流る
眼よこしとぬんまに二なる眼は流る

ねらぬくし二をたハ眼平にもよるるま
るの時の後ハ眼平にさうよふ来るし

一 中二作まのち支

小沼の秋涼しく月おこ

涼しくさふてハまの秋し涼しくさふてハ

ぼしハまの秋し

遠近の柳色より雨晴ニヤ

此指をさふるし一雨晴く柳の姿よりま

小沼の秋の入りやハさうと声文て

ク有るさふるやハさうの秋文て

白きさふるの秋の雨晴て

よさめてまのしさのちさめ能うたや

小沼の秋文てハさうと声文中の入りや

と入又月夜秋文てハさうと声文中の入り

やうのさふるさふるさふるさふるの

くさふるさふるさふるさふるの

の目もこぼれぬらん

一 才なきもの

誰音もあはれぬ

是れは人の心

此の世に生かす人の心

是れこそ人の心

かきこむ人の心

一 心なきもの

たれもなき人の心

そなたもなき人の心

ふりてゆく人の心

静かにゆく人の心

心なき人の心

かきこむ人の心

おもしろくゆく人の心

の心

一 世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも
— 世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも

大正十一年の月
大正十一年の月

世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも

世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも
大正十一年の月

世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも
世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも

世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも

一 世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも

世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも

世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも

世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも

世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも

世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも

世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも世の世にふるるも
大正十一年の月

一 ぼあーぶ川上テのいーん

呼あーんおのくさーの妻のこまめま
のるひまのぼいあーのめまのまの白あれ
七八のままのまーお九十一二平のりて
十のめまのまーまのまのまのまのまの
六のめまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまの

一 月あかしく

かたしうを面ハるめ裏十はるめうう二と名のたも
はふくあるあるの時と只一白の地をたし能くさ
かり

一 二紀め楊梅やの文

よみの白むつ美木の梅友と頌ちてはるは梅梅
り一梅とをき前夜の巻と梅一本むなしくぬき
みかきおれくすす一或は庭の志をあらうと
梅梅かきすくす一正の志とくそ一梅のさく

也一也一梅つた又の梅友の神とれの時志の形
は静ひい見ぬまをれと梅友の梅とを梅
他と前白の梅とを梅とを梅とを梅とを梅と
附居くはたは

梅の志とくそ一梅のさく

梅の志とくそ一梅のさく

たの梅とを梅とを梅とを梅とを梅とを梅とを梅と
梅とを梅とを梅とを梅とを梅とを梅とを梅と

此の山をいふは名めてあれた樹とていふは

おしひも木のまゝのまゝ

ひやうは遠く

大の山や木のりたあれた遠くまで
見るとは

流氷凍山の電と亭^{アヒレ}めて

枝一木のまゝ古^{アヒレ}

大の山も同じに

朝まぶら末^{アヒレ}にぬるふを

おの木のみるれのみ

大の木のまゝ

いぬも

おの木のまゝ

おの木のまゝ

おの木のまゝ

おの木のまゝ

たれ附やそあすふく見ぬたを許せぬ
おちひはくは友いふもけりてはかよふの
まんのり花のそふぬつも詩をもふまゝに
それかほく言をさゆやまもけり

一 花よ物也植物よ花けしの夜

朽木も咲けり花の一夜さ
残る花ふく衣ふくも花

梅咲く指ふる白く朝月夜

あふ梅咲く梅の

梅ふくの梅一丸花れ下ふ

花きもやあて梅しきつふれふ

いくまよ梅の梅の梅

つ前白のふくも附白のふく梅のやめけり

しすもいふふ美ふも花けりてものめはきれ

一白のそめも多し又或人のほめ花ふたふ

福ゆきけるふき哉よき並よ何な致しゆのよらま
れますし白地しりも。

一 幸りねれ花ふり名の花すのたま

笑ぬも笑ぢりけり

冬枯の小池の森の枝を折て

是しと考へ知りやまお白のまを何向のうたのま
ふはまを。

一 妻も糸糸捻ぶのたま

りすみししむしし時き子細りしんかぶとす
ほせて海とりすま各と採つるは採のうまよてまの
まよふ成りしんま白の糸めんとまは採つるも
あつたし能たもすし又ふも糸糸海ものかお子細
那し小神のま糸糸を帽子のま糸糸を採ふしんま
現ふままのま糸糸をのま糸糸をしし實致るも
し糸糸採ふしんまの白糸糸を採つるも
日影のこめ糸糸のま糸糸を採つるも

小波のうねりもまた波の日はさかすか

らねのうねり

一 燕のうねり

燕のうねり入弱り

去る波もさかすか

燕のうねりあつた

燕のうねりあつた

一 燕のうねり

燕のうねり

燕のうねりあつた

燕のうねりあつた

燕のうねりあつた

燕のうねりあつた

燕のうねりあつた

燕のうねりあつた

まゝと押しぬれしうらほもるゝ(保)とが押(保)
疑ひもろ(押)ぬし又つのをまきつのと云はく
れしとのまろても(保)もるゝ(保)のぬらぬ
まろつみまろつ(保)か(保)は(保)の(保)ふて云
切(保)とのまろつ(保)も(保)も(保)

もろつ(保)ぬらぬ(保)か(保)は(保)の(保)ふ
室(保)も(保)ら(保)ぬ(保)も(保)も(保)も(保)も(保)
ふ(保)の(保)ぬ(保)ら(保)ぬ(保)も(保)も(保)も(保)も(保)

まろつ(保)ぬらぬ(保)か(保)は(保)の(保)ふ
い(保)ぬ(保)ら(保)ぬ(保)も(保)も(保)も(保)も(保)
まろつ(保)ぬらぬ(保)か(保)は(保)の(保)ふ
保(保)の(保)ぬ(保)ら(保)ぬ(保)も(保)も(保)も(保)も(保)
か(保)ら(保)ぬ(保)ら(保)ぬ(保)も(保)も(保)も(保)も(保)
又疑(保)ひ(保)ぬ(保)ら(保)ぬ(保)も(保)も(保)も(保)も(保)

まろつ(保)ぬらぬ(保)か(保)は(保)の(保)ふ
保(保)の(保)ぬ(保)ら(保)ぬ(保)も(保)も(保)も(保)も(保)
保(保)の(保)ぬ(保)ら(保)ぬ(保)も(保)も(保)も(保)も(保)

梅はまゆゆしえ白しうら

たのいせいの白をめてしほくまのさうじ

一上の白ふるのさ

節^一麻^れめ 又^一白^る面^はは^れ白^し一
鳥^の目^は 又^一鳥^の目^は 又^一鳥^の目^は 又^一鳥^の目^は

一上の白ゆるに神のさ

末身 形^をと^品下^一一^の白^に又^一
現を 相^よき^まの^白の^次現^一

るま くふま まま まま まま

たの白まの^一階^前お^まの^一一^の白^に又^一

二のさかる^一現^上の^一白^に又^一

う^いぬ^もあ^う何^もさ^る白^ふま^一一^の白^に又^一

く^めあ^りて^いは^りま^はり^まの^一白^に又^一一^の白^に又^一

く^あり^まる^まの^一白^に又^一一^の白^に又^一

花の咲もあつらん
花の咲もあつらん

一 小てなをきよめり

と 花をさつるはのさ業めて
と ちよの齡の末をアアめて
と 為衣川合ももろ衣ふて
と ぬぬまよふ可い命よ
ハ 賢ハくのんれやみふて

たのぬとともりのま入もていん
ら 花をさつるはのさ業めて
一 花をさつるはのさ業めて

物ぞはうかたは洋もて
佛も花もあつらん
灯ふおの船くつすめて

めは河津や奇あま云下をなをさつるは
めは花もあつらん

此一冊を長頭磨者様宗波法師
紹巴お新吹亨時く是は定々禮
付し候

近書角下中司斎及も道徳寺

年

時永の和え申候九月下院

花紙相中宗憲下

一 伽詣分地更

又誂を伽のまうり候まうり成事候お似
まうり候を誂をなれり成下誂玉篇め皮皆
此切一節蔵し誂を誂め類い伽侶ら
日本記め伽優ひつり候を誂
天白女命岩戸前
乳ヲ乳所脛言かけ
林いさめい
誂玉篇小云南尾の切誂誘し音義候大
め異し誂玉篇小胡皆此切初し合し調し
侶し武を作錯亦酒後強の切初合し大吊切

選く淳干斃優旃を戲之めふと考せて時の
天子に何れを好むと問ふと一與義抄史記
多行して滑稽を準す一と戲之めふと考
る一入事法抄め是に女を好むと考
る一と考ふと考ふと一と考ふと考ふと
是も彼の史抄と考ふと一史後史記滑稽傳
川て曰大史云々天道恢々豈不大哉法之微中
亦不可解紛一優孟を多辯し常以談笑

汎諫と優旃を以て為笑之也此は大道淳
然ハ滑稽言多辯之郭舍人發言辭雖不恰大道
然令入主和悦是滑稽言を大道の妙と考
ぬ我と考ふ時小用あり何潜是を準す一と
佛法も是あり善法ありて戲之めふと考
くを教へ欽しめて以て道ありといふは戲之
は道根方便とも考ふ者のいふは方便の
とも善法ありといふは實ありて是れ道あり

いもねの回りの掘り溜りの成るめをて入る
汲り研りぬかたをて里人仕事にまよる
てを基かきぬく采女らにびくたけて首城王
いふに解のいふも又いふて人々のあはれ
いへ成る清きふ地能と是れ取て百歩乃
年十六の女とあふくを獲るくをぬくかめ
あけけいし詩曰喜か戯説等不為荒^ナ口と
いへ海ぬか孔子の子遊^ニし武^ニ備ぬいふ

経歌の声のゆやまをいして刻歌なりぞ
用牛刀このゆくも成るをくはなるにたれ
とまわれくも成るを

大佛僧の海に
好て佛事見ゆる中
か古今の席九品をり
まゝのいふ

隱居

白子
清久

